

低学年児童の「気づき」に関する研究 -生活科の中の擬態語・擬音語に着目して-

○池田仁人^A、戸北凱惟^B
IKEDA Yoshito^A TOKITA Yoshinobu^B
静岡県榛原郡吉田町立自彊小学校^A、上越教育大学^B

【キーワード】：生活科 知的な気づき 擬音語・擬態語

I オノマトペについて

オノマトペは、擬声語・擬音語・擬態語の総称である。音声、ものの様態を表し、臨場感のある、微妙な描写を可能にしているが、スコウラップらが指摘するように、この言葉は幼稚な言葉であると考えられてきた。本研究は、日本語オノマトペのもつ、ものの様態を鮮明、簡潔に表す表現力に着目し、生活科における、気づきの表現方法としての可能性を追求する。

滝浦は、オノマトペとメタファ等比喩とは、幼児が世界を把握し、表現する際の機能上相補的な関係にあるとしている。しかし、生活科におけるオノマトペの有為性は不明である。

II 目的

本研究は、自然教材にかかわる活動中の子どもたちのオノマトペが「気づき」の事実を表現し、伝達する機能を持つことを明らかにする。

III 調査

調査1：初発の気づきにおけるオノマトペの機能

① 目的 初発の「気づき」の段階におけるオノマトペの役割を明らかにする。

② 手続き

2年生の子どもに未知の種子を5種類、手渡し、観察、説明させた。観察に関する文章を、読点を区切りとした文を1文として分割し、一文ずつオノマトペ使用、非使用に分類し、何を表現しているか、諸感覚を基に分類を行う。

③ 結果と考察

「オノマトペ使用・触覚的な記述」「オノマトペ非使用・視覚的な記述」の二つが有意に多いことがわかった。記述内容から、難解な言葉を使わなくては表現しにくい場合にオノマトペを用いる傾向が強い。特に表面の状態や感触を表す場合に多く用いられる傾向がある。一方、一般的な副詞は、オノマトペに変換されない。

対象の触覚的特徴は、個人的な印象の度合いが大きく、表現が難しい。それを助けるのがオノマトペによる表現である。

調査2：活動中でのオノマトペの機能

① 目的

現在思いを持って取り組んでいる活動において、気づいたことを表現するためにどのようにオノマトペを用いているのかを明らかにする。

② 手続き

活動を振り返る絵日記等から、発見や体得した知識、観察結果など、気づきに関する文を抜き出し、オノマトペ使用、非使用に分類し、何の表現にオノマトペが機能するのかを分析する。

③ 結果と考察

「オノマトペ使用・触覚的な記述」「オノマトペ使用・聴覚的な記述」「オノマトペ非使用・視覚的な記述」の3つが有意に多かった。表面の状態、感触を表す場合に用いられ、全身で感じ取ったことについてオノマトペが用いられることが特徴として挙げられる。

対象の触覚的特徴の表現のためにオノマトペが駆使されている。触覚や聴覚でつかんだ特徴は、

主観的であり、個人的な感覚に依存する。その個人的感覚を一般化し、他に伝達しようとする作業がオノマトペへの変換と言える。このことから、オノマトペは、表現しようとする意思の表れでもあると考えることができる。対象の持つ様々な特徴について、一人一人が捉え、表現をするオノマトペは、「知的な気づき」のあらわれの一つであり、科学的な思考の初歩段階であると認識することができる。

調査3：オノマトペの伝達機能

① 目的 オノマトペの、気づきの伝達手段としての機能を明らかにする。

② 手続き

オノマトペを被験者に提示し、それがどのような状態を示しているのか、またなぜそう思うのかを質問紙、聞き取り併用で調査する。はじめ単語だけで提示し、その後、文全体を提示した。生活・学習経験によって解釈や判断基準が異なる可能性も考慮し、被験者は2年生と6年生とした。今回は、多くのオノマトペの中から、使用頻度が特に高い2語を選んで調査に用いた。

③ 結果と考察

単語だけで提示した際、6年生では、ほぼ全員が意味を正確に答えることができた。2年生では、約8割以上が意味を正確に答えることができた。文全体を提示した際の結果について、6年生では、9割を超す正解率であった。2年生も、やや正解率は落ち、約80%が正確に答えることができた。正答者はほとんどが判断の根拠として、実際に同じような場面を経験していることを挙げている。

単語提示の調査の結果、オノマトペ単体でもその示す状態のイメージが伝えられることがわかった。オノマトペを含む文章は、オノマトペと前後の文脈による場面の確定と、受け手が同じような経験をしていることにより、より正確に伝達されやすくなるものと考えられる。オノマトペは利己的な表現ではなく、場面情報を多く含んだ伝達機能を持つ表現方法の一つであり、聞き手にとっても直感的に対象の特徴が理解できるものであると言える。

IV 結論

○ 活動初期では、対象の触覚的特徴にかかわる個の印象を示す場合が多く、活動が進むにつれ、触覚的特徴に加え、聴覚的特徴をとらえたものも多くなる。

○ オノマトペは、個々が抱いた印象を個々の表現方法で示しており、「知的な気づき」のあらわれの一つであり、科学的思考の萌芽ととらえることができる。

○ オノマトペは、利己的な表現ではなく、相手にその様子まで想起させることができる濃密な表現方法である。

以上の結果から、オノマトペは、子どもの認知を示すものであり、「知的な気づき」の手がかりとなること、将来の理科教育においても注目すべき表現方法であるといえる。